

水は必然的にH₂Oか？

—クリプキの「形而上学的必然性」への批判—

上田 徹

S. クリップキは、「名指しと必然性」において、ラッセル・フレーゲに代表される固有名を短縮された記述とみなす名前の記述説を退け、あらたに、固有名を固定指示子とする指示説を提唱した。このクリプキの立場は指示の因果説と呼ばれているが、H. パトナムもまた、クリプキとはほぼ同時に同様の指示説を明らかにし、クリプキとともにこの立場の代表者とみなされている。しかしながら、この両者は、特に自然種名において同様の分析を示しながらも、根本的な哲学的な立場の相違がある。このことは、おもにパトナムが、自分自身の哲学的立場を「内在的实在論」として自覚するに従って顕著になり、パトナムからクリプキへの明示的な批判となったといえるであろう。

ここでは、クリプキの「名指しと必然性」およびその後に発表された論文から、クリプキの哲学的な立場と指示の因果説との整合性を検討してみたい。私は、そこには多くの難点が存在していると考え。そして「名指しと必然性」以降のクリプキにとって問題になったのはこのような難点であった。さらに、クリプキに対するパトナムの批判点も示し、この二人の哲学的な立場の相違を明らかにし、指示の因果説を支持するためにはどちらの立場が有効であるかを考えたい。

1. 「名指しと必然性」におけるクリプキの指示説 — 指示そのものの記述からの純化

まず、クリプキ自身の指示説の概要をふりかえっておこう。クリプキは、特定の対象を一意的に指示することが可能であることを前提とし、その指示を行いうるものを「固定指示子」(rigid designator)と呼ぶ。われわれがふつう名前と呼んでいるものは固定指示子である。ここでいう固定性とは、あらゆる可能世界でその指示子が同一の対象を指示するということである。例えば、「アリストテレス」は、反事実条件法のなかでもアリストテレスその人を指示しているとかれは考える。さらに、クリプキは、「必然的」・「偶然的」について、存在論的な立場から定義を行う。必然的とは、あらゆる可能世界で真であることであり、偶然的とは、ある可能世界(例えば現実の世界)でだけ真であることである。従来、アプリアリと必然的、アポストリアリと偶然的を結びつけてきたのは、認識論的な概念を存在論的な概念と混同してきたのであり、実は両者は独立である。クリプキは、必然性といった様相概念は形而上学的な指示対象に帰属し、それらは我々の認識からは独立なのであると考えた。それ故、かれの必然性を特に「形而上学的必然性」というのである。従って、対象の性質でいえば、ある性質がその対象に欠くことのできないもの、つま

り、それを失ってはその対象ではなくなるとき、その性質は必然的であり、その性質を失うことが可能であるとき、あるいは、その対象についてその性質を失った反事実的状况を想定しうるとき、その性質は偶然的なのである。

以上からクリプキは、様々な同一性言明の様相を考察する。まず、固定指示子が相互に同一であるという「真なる」言明は、それによって固定的に指示される指示対象の同一性から、必然的である。この例には「キケロはタリーである」という名前の間の同一性、「水は H_2O である」というように物理的な組成をあらわす理論的な同一性がふくまれる。反対に、対象の偶然的性質、あるいは、指示を固定するための何らかの記述との同一性言明は、偶然的である。そのような記述は、非固定的または偶然的指示子とも呼ばれる。

クリプキがこのような様相概念に関わる考察をおこなったのは、ラッセル・フレーゲの見解（とかれが呼ぶ）名前の記述説あるいは記述群説への反論のためであった。クリプキの行っていることを一言でいうとすれば、それは「記述からの指示そのものの純化」ということができるであろう。まず、クリプキは反事実条件法によってそれを行う。「アリストテレス」についてわれわれは様々な記述を行うことができる（哲学者である、スタゲイラに生まれた、プラトンの弟子であった、等々）。そして、これらの記述のどれにも反事実的状况をわれわれは考えうる（アリストテレスは哲学者ではなかったかもしれない）。しかし、このときこれらの反事実的状况を記述する文においても、アリストテレスがほかの誰かを指示していると考えるのはわれわれの「言語的直観に反する」のである。アリストテレスがアリストテレスでない状況はそもそも可能な状況ではない。従って、その同一性は必然的である、とクリプキはいう。ここからクリプキは、記述群理論の特徴をいくつかのテーゼに要約し、その批判を行う。細部には立ち入らずに結論を述べれば、かれは、指示対象の偶然的な性質によって、アプリアリに指示を固定する「命名儀式」のような場合を除いて、記述群と指示対象との関係はアプリアリとはいえず、偶然的である、と結論している。ここから、名前はいかなる記述、あるいは記述群とも同義ではなく、たとえ記述内容が誤ったものであっても名前は指示対象を指示するということになる。

さて、名前の指示を記述から強い意味で独立であるとみなすと、われわれは一体どのようにしてその指示を学ぶのであろうか。また、「正しい指示」ということがいいうるとしたならば、それはどのように可能か。クリプキは、「指示の歴史的連鎖」にその根拠を求めている。指示の原初的な場面として、かれは「命名儀式」を設定する。それは、記述によるアプリアリな指示対象の固定か、指示対象を直認し、それを直示的に定義することによって行われる。名前は、言語使用の共同体の内部で、この原初的な場面から、しだいに人から人へと受け渡されることによって、その指示対象の指示を受け継ぐ伝達経路をもつことになる。たとえ、歴史的、地理的に隔たっていようと、その経路ははじめの命名儀式の場面に遡及してゆくことができるのであり、それ故、指示は「固定されている」のである。これが「指示の因果説」にほかならない。

2. クリプキによるepistemicな立場の排除

クリプキの指示説の大きな特徴は先にも述べたように、様相概念を存在論的と見て、アプリアリ・アポステリアリといった認識論的な概念とは区別したことである。そのため、かれは、従来は考えられなかったアプリアリで偶然的な真理（1メートルの定義など）、アポステリアリで必然的な真理（水は H_2O である、など）といった様相をみとめることができたといえる。しかし、かれの様相概念はepistemicな立場を排除したものであり、われわれが通常「可能性」の概念で考えているものとは大きく異なるのである。クリプキ自身が用いている例によってそのことを示そう。

クリプキは、記述によって名前の指示を固定するアプリアリで（それは定義的であるから）偶然的な真理の実例として、ルヴェリエによる海王星の発見の例を挙げている。⁽¹⁾ルヴェリエは「ほかの惑星の軌道にしかじかのずれを引き起こす惑星」として、海王星の存在を予言したのであった。そして、そののち海王星はしかるべき位置に発見された。クリプキはこの場合、ルヴェリエは海王星という指示の固定のために、海王星そのものにとっては偶然的な性質である「ほかの惑星の軌道にずれを引き起こす位置にある」という記述を用いたと考える。そして、「もしほかの惑星の軌道のずれがある惑星によって引き起こされるのならば、それは海王星である」という言明はアプリアリで偶然的な真理であるというのである。それがアプリアリであるのは、これが一種の命名儀式だからである。ではなぜその言明は偶然的であるのか。それは、用いられた記述、つまり、かくかくの位置に海王星が存在するということが海王星におこらなかったことをわれわれが想像しうるからである。海王星は100万年前にその軌道から弾き出されており、そのような乱れを引き起こさなかった、という反事実的状况は可能である。クリプキはさらに、そのような反事実的状况はルヴェリエ自身によっても「十分に信じることができた」というのである。

ルヴェリエ自身の立場から考えてみよう。かれにとって、自分がその存在を予言している惑星が（かれは海王星を望遠鏡でも見ていない）、その惑星自身に生じた反事実的状况のゆえにそこに存在しないと考えることは可能だろうか。そのような想定をかれに迫ることは無意味である。かれが可能と考えることは惑星の軌道と重力に関する理論的な根拠によって支えられているのである。そのようなかれをとりまく事実が、かれが可能と考えるものを指定しているのではないだろうか。そう考えれば、クリプキの想定は、可能性に対するわれわれの直観的な理解に反しているともいえるのではないだろうか。クリプキは、この海王星の存在に関する言明を、1メートルを「時刻 t_0 における棒Sの長さ」として固定的に定義する言明と同様の言明とみなし、それ故、アプリアリな真理とみなしている。しかし、記述は単に主観的になされるものではない。ルヴェリエの心得ていた理論、および経験的に得られた観測数値がその記述を与えたのである。いわば、かれにとっての現実の諸条件のなかでのその言明の重要さが、かれにその予言をなさしめたのであるといえるのではないだろうか。

しかし、このような反論は、クリプキの立場から見れば不当である。クリプキにとっての事実とは、このような現実の諸条件ではなく、指示対象の存在である。epistemicな立場からその対象について規定することは、クリプキの様相概念から極力排除されているのである。従って、クリプキの可能性はクリプキが考える事実によって指定されるものであり、その前提に立って、かれの偶然的真理は理解されねばならないのである。クリプキの指示説および様相概念を理解するには、クリプキ自身の前提を守らなければならない。それは、固定指示子は唯一の指示対象を指示しうると約定し、実際の指示の場面で生ずる多義性を排除すること、および、様相概念はそのような指示対象そのもののnon-epistemicな属性として取り扱うということの二点である。

だが、そのような前提がクリプキ自身の指示説と整合的であるのかという問題はまた別であろう。この二つの前提は、すでに「名指しと必然性」の内部においても困難を引き起こしており、そののち、クリプキ自身に再検討を迫ったのである。さらにこの困難は、二つの前提と「指示の因果説」それ自体との整合性も疑問に付すのである。まず、クリプキの二つの前提がはらむ問題点を考えてみたい。

3. 物理的同一性と指示の多義性

はじめに、第二の前提、指示対象にとっての本質的事実とクリプキがみなすものから批判を始めよう。クリプキは、様相的な考察を、指示対象の必然的・偶然的性質から生じる可能的状況の考察として行っている。しかし、その指示対象そのものの必然的性質として、クリプキは何を具体的に考えているのか。かれにとって、「物体についての事実⁽²⁾は、それを構成する分子についての事実以上の事実ではない」。ここから、クリプキは指示対象の起源と物理的組成がその対象における必然的性質を形成すると考える。

しかし、固定指示子が指示する指示対象の同一性を単なる物理的同一性に還元することは、誤りであろう。名前が一定に構成された事物の同一性を名指すと考えることは、ウィトゲンシュタインの言葉を借りれば、「名前の意味とその担い手とを混同すること」である。一定の仕方で合成された物理的同一性について語ることに對しては、次のウィトゲンシュタインの反論で十分である。

「しかし、実在が合成されるような単純な構成要素とは、どんなものなのか。——ある椅子の、単純な構成要素は何か。椅子を組み立てている木材の断片なのか。あるいは分子なのか、それとも原子なのか。——「単純」とは、合成されていないことである。だから、ここで問題になるのは、どのようないみで＜合成されている＞のか、ということである。＜椅子の単純な構成要素について無造作に＞語ることは、全くいみをなさないのである。……『この樹木の視覚像は合成されているのか。そうだとすると、どれがその構成要素なのか。』という哲学的な問いに対する正しい答えは『それは君が＜合成されている＞ということは何を了解しているか、に依存する』ということである。（しかもこれはもちろ

ん答えではなく、問題の拒否なのである。)」⁽³⁾

クリプキのように「このテーブル」はまさに「この」分子から構成されている、と語ることに具体的にどれほどの意味があるのか、また、「私」の起源がまさしくこの一定量の蛋白質とアミノ酸であると語ることにどれほどの意味があるのか。そのような物理的同一性にはつねに曖昧さがつきまとうであろう（物理学的に確認された指示対象の組成には別の批判をしなければならない）。クリプキは自らのnon-epistemicな様相概念を堅持するために、物理的同一性という、固定指示子に対応する「なまの事実」(bare fact)を安易に想定してしまっている。このような「名前一担い手」関係、そして、そこに基礎をおく必然性の概念には様々な批判が可能であろう。⁽⁴⁾

つぎに第一の前提、固定指示子の指示の多義性の排除について、クリプキの態度は一貫しているか、という問題点を考えてみたい。この多義性の問題に対する態度が、実は、パトナムとクリプキの大きな相違点なのである。1978年の「意味と精神科学」は、パトナムにとって、かれの哲学的立場を實在論から「内在的實在論」へと展開させた、大きな転換点と考えることができるが、その転換を促したのがまさしく、タルスキーの真理定義の實在論的解釈から生ずる指示の多義性と、クワインの「言葉と対象」における指示の不可測性、またそこから生ずる翻訳の不確定性の問題であった。従って、パトナムの指示理論は、指示の實在論的解釈に不可避免的に生ずる多義性の問題を踏まえ、またそれを乗り越える意図を同時に持っているものであった。しかし、クリプキは、「名指しと必然性」においてはそのような指示に関わる懐疑主義にほとんど注意を払っていないのである。それが、「名指しと必然性」におけるクリプキの固定指示子の固定性に対する、まさしく「固定的な」依存を可能にしたのである。しかし、そこでもやはり、指示の多義性の問題は、避けることができなかった。まず「名指しと必然性」において指示の多義性の問題がどのようにあらわれているかをみてみたい。

クリプキは「名指しと必然性」では指示の多義性を排除することを約定しているが、そのかれ自身が、記述説への批判のなかで指示が多義的になる可能性を考慮に入れてしまっているのである。それは、例えば、「ゲーデル」という音声で実際はシュミットを指示しているという例をかれ自身が用いていることから分かる。かれはなぜそのような問題を考慮する必要があったのか。⁽⁵⁾

多義性に関して、「名指しと必然性」の時点でのクリプキにとって問題であったのは、ドネランの行った確定記述の指示的用法と帰属的用法の区別である。⁽⁶⁾それは以下の内容を持つ。ある確定記述、例えば、「あそこでシャンペンを飲んでいる男」という記述句を用いて、誰かが「あそこでシャンペンを飲んでいる男は楽しそうだ」と言ったとする。しかし、その指示しようと意図した当の男は、実際にはソーダ水を飲んでいて、この場合、さきの言明は真か偽か。ラッセル流の真理条件で考えれば、その言明は事実と反している故、偽であるとされねばならない。しかし、ドネランは、この言明を端的に偽であると考えるのはわれわれの言語的直観に反すると考え（なぜならその言明は、指示しようとした

当の男についてなにがしかの真理を語っている）、この言明は真理条件からのみ、真偽を割り当てることができないものとし、これを記述の指示的用法としたのである。他方、帰属的用法とは、ある確定記述について話者が指示しようと意図した対象とは限らず、「何であれ」、その記述に該当する対象についてなにごとかを言明しているとする用法である。さきの例で考えれば、実際はソーダ水を飲んでいて男のちょうど後ろに、シャンペンを飲んで楽しそうにしている男が実際にいた場合、その男に対してさきの言明は帰属するのである。この場合は、「指示」(refer)にたいして「外示」(denote)という言葉が使われる。

さて、黒田亘氏が指摘しているように⁽⁷⁾、ドネランのこの区別は、指示に際して話者がおかれるepistemicな条件を考慮しており、本来、指示からepistemicな条件を取り除こうとするクリプキには必要ないはずである。しかし、ドネランの指示的用法は、記述句に指示的はたらきを認めうる説であり、指示を名前固有のはたらきとし、指示を記述から純化しようとするクリプキには無視できない説なのである。そのために、クリプキは「指し違い」の問題も考慮に入れている。クリプキの挙げている例を示そう。二人の男が遠くから落ち葉を掃いている男を見かけて、一方の男が他方の男に「ジョーンズが落ち葉を掃いている」と告げたとする。しかし近寄ってみると、それはスミスであった。このとき、指し違いをした男は、「ジョーンズ」でスミスを指示したことになるのである。そして、クリプキはこのような可能性を認めるのである⁽⁸⁾。

しかし、指示の多義性を一度容認すれば、名前が記述から独立に、固定指示子として同一の指示対象を持つなどと言うことは不可能になるだろう。そして、発話における主張可能性条件を考慮しなければならないことになり、それは文全体の真理値にも影響するのである。これは、根本的にクリプキのepistemicな条件の排除の前提と相容れないのである。

クリプキは1977年の「話者の指示と意味論的指示」、1979年の「信念についてのパズル」において、この指示の多義性の問題を検討している。それでは、クリプキはこの多義性の問題に対してどのような解決を与えているのであろうか。「話者の指示」におけるクリプキは、ドネランの記述の指示的用法と帰属的用法を正面から問題にたて、反駁している。クリプキの反駁は以下のプロセスを経る。クリプキはまず、ドネランの二つの用法の区別は、ラッセルの指示理論を反駁し、それに替わるものとして提出されているかという点を問題とする。クリプキの答えはNoである。その理由は、ドネランは確かに「あそこでシャンペンを飲んでいる男」が、偽なる記述でありながら、なにがしかの真実を語っていると認めたが、それは真であるという主張をしたわけではない。なぜなら、指示された当の男の背後で実際にシャンペンを飲んでいる男が悲しんでいる状況があり得るからである。その態度は正しい言語的直観であるとクリプキは評価する。つまり、ドネランは指示的用法の持つ真理条件が非ラッセル的であるとまではいわなかったのである。従って、かれはラッセルと対立しているわけではないとクリプキはいう。それでは、多義性はどのように処理されるべきか。クリプキはこの多義性を、意味論的指示対象と話者の指示対象を区別

することによって排除しようとする。まず、意味論的指示対象は、話者のもつ指示子が、規約的に決定する指示対象である（もしここにも多義性が生じる場合には、言語規約、話者の意図、様々な文脈の特徴によってそれを排除する）。それに対し、話者の指示対象は、その指示子によって話者が支持しようとする意図した対象である。「指し違い」はこれによって説明可能である。例えば、「ジョーンズ」という名前で実際はスミスを指示している場合、「ジョーンズ」の話者の指示対象はスミスそのひとである。事実の誤認は、話者が話者の対象を意味論的指示対象と一致していると「信じる」ケースであり、その場合にも指示を認めるという方向で、ドネランの多義性は解消されるべきである、とクリプキは主張する。

クリプキは、意味論的多義性を前提としない「統一的説明」を優れた理論とみなす。なぜなら、多義性はどのような言語、例えばドネランの多義性を解消するような表示を持った「D言語」にも生ずるからである。従って、「本当に強いられることなく、また、多義性が真に存在するという真に差し迫った理論的・直観的根拠なしに、多義性をあらかじめ想定するべきではない」⁽⁹⁾とクリプキは述べるのである。

しかし、発話行為についての一般的語用論的理論を多義性を排除するために導入することは、本来のクリプキの指示説と調和するであろうか。明らかに矛盾すると私には思われる。クリプキは話者の指示対象を存在量化に拡張し、 $(\exists x)(\phi x \wedge \psi x)$ において、 ϕx が、指示子 x によって話者がある対象について何かを主張することを意味するとすれば、 ϕx を満足する対象は、話者には明白であるから、 ϕx をその対象が現実⁽¹⁰⁾に満足するしないに関わらず、それは話者の対象と呼ばれるといっている。名前もこのように話者の指示対象を指示することを認めるのであれば、固定指示子の指示に、話者のおかれた epistemic な条件を考慮に入れざるを得ない。これはクリプキ本来の指示説の立場とは相容れ得ないであろう。

4. 指示対象と記述

クリプキが「話者の指示」でとった多義性を排除する方法は、語用論的理論装置を導入することであった。しかし、この方法は、「名指しと必然性」でのかれのそもそも持っていた指示説とは調和的ではない。なぜなら、そこでは名前と指示対象は、多義性を許容しない固定的な指示関係を持つことが前提されていたからである。そして、その指示対象の性格は「形而上学的な」ものであった。

それゆえ、クリプキは「信念についてのパズル」においては、別の角度からかれの指示説を救済しようとしている。それは、記述と指示対象との関係である。かれが着目した点は以下の問題点である。まず、信念文脈などの命題的態度 (propositional attitude) を表す文脈内では、共指示的な固有名が、必ずしも文全体の真理値を変えることなく置換可能ではない。例えば、「かれはキケロははげであり、タリーははげではないと信じていた」

という文の「キケロ」と「タリー」を文の真理値を変えることなく置換することは不可能である。この事実は、ふつう、固有名に対して、「意義」の相違を認めるフレーゲの見解を支持する事例のひとつとして受け入れられている。しかし、クリプキによれば、事態はそれほど単純ではない。なぜなら、置換原理を問題にせずとも、脱引用化原理（disquotational principle）と翻訳原理だけを用いて、他者の信念、あるいは、他言語の翻訳を行おうとする場合、もしわれわれが、「共外延的」ということを指示そのものの固定性から学ぶことなく、固有名と同義である意義、すなわち確定記述のみによってそれを行おうとするならば、まず、他者の個人方言における固有名を正しく翻訳することができなくなるばかりでなく、さらに、どちらも正しい相矛盾する信念を同一人に帰属せねばならない結果に陥るからである。かれは、以前フランス語を話していた一人の男が、英語を話すようになり、LondreとLondonという意義を等しくする共指示的な二つの固有名のそれぞれに相矛盾する述語（美しいと美しくない）を付与する例を挙げ、そのことを示している。ここからクリプキが引き出す教訓は、信念文脈への固有名の置換原理の適用不可能をもって、直ちに、ラッセル・フレーゲの記述説を支持する根拠とすることはできないということである。この「指示的不透明性」にまつわる「パズル」は、信念文脈そのものの本性に根ざしており、信念内容を論理的に取り扱おうとするすべての試みが避けては通れないものだからである。この点においては、記述説もまた同様の困難に直面していることをクリプキは示したというのである。

クリプキは、「信念のパズル」においては、以前と異なる戦略を取っている。ここでかれは、多義性の問題を理論的に解消しようとせず、その問題はどのような理論にも不可避免的に生ずることを示し、この問題にかれの立場からのけりを付け、返す刀でラッセル・フレーゲを再び批判するのである。そこで、クリプキは、フレーゲの意義も多義性を許容せざるを得ないことを示す議論において、以前と同じように、指示対象と記述の切り離しをラディカルに行っている。だが、まさしくこの点にクリプキのフレーゲ解釈の難点と、かれ自身の難点も垣間みられると思われる。まず、フレーゲの意義の解釈の難点から見てみたい。

クリプキは、フレーゲの意義を、固有名と同義であるような確定記述として考えている。しかし、フレーゲ自身の考え方は、

①固有名は確定記述と本質的な相違点を持たない。

②固有名は指示対象と意義を持つ。

ということを基礎にしながらも、以下の点でクリプキの解釈とは相違する。

③固有名には、指示対象の「提示様式」（modes of presentation）として様々な意義が与えられる。従って、固有名は確定記述と同義とはみなされてはいない⁽¹¹⁾。

④固有名の意義は、その固有名が属する言語あるいは表示法の全体に十分精通しているあらゆる人によって把握される。（意義の客観性）⁽¹²⁾

これらの点で、クリプキのフレーゲ批判は的を得ていない。フレーゲによれば、「キケロ

はタリーである」は二つの固有名の意義が異なるために、トリヴィアルな分析性ではない「認識価値」をもつとされる。しかし、クリプキは、確定記述を固有名と同義的と考え、さらに、その確定記述は、各個人によって恣意的に選択されるとしたため、意義は各個人方言に相対的かつ主観的なものとなり、上で見た、脱引用化原理と翻訳原理にともなうパズルの原因となった。しかし、指示対象の「提示様式」としての意義は、その言語を用いる話者の経験的知識の多寡によって、様々な指示対象の与えられ方を提示するものであり、また、それによって、話者同士が同一の指示対象について会話をしていることを知るものでもある。「認識価値」が生ずるのはまさにこの点である。クリプキの同義性による意義の捉え方は、記述と固有名との関係を話者がアプリアリに知ることのできる定義的關係としてとらえ、指示対象の関与する余地をなくし、このような経験的知識を許容する領域を消去しているのである。さらに、この定義が、話者の個人方言における「私的な」ものであることを強調し、意義の客観性を認めず、指示対象の客観性のみに依拠しようとするものがクリプキのねらいである。

なぜ、クリプキはこのように考えたのか。かれは「名指しと必然性」のなかで記述（群）論者の見解を批判しているが、その要点は、どのような記述（群）も固有名の指示対象を特定するための必要条件ではなく、指示の観念にあらかじめ依存することなく指示を説明するのは不可能である、ということである。だが、かれが記述の有効性を認めている例がひとつだけある。それは、アプリアリで偶然的真理を表す言明にみられるように、名前と同義的でない一定の記述によって、指示を固定する場合である。クリプキは、指示の固定の原初的場面を、あたかも命名儀式のように、命名者がその指示対象を直認しており、直示によってその対象を命名する場面であると考えている。そして、記述をクリプキが認めるのも、記述に対してこのような使用がなされる場合である⁽¹³⁾。

しかしながら、この場合の記述は、「指示を固定する」ための道具であり、まして、その内容の認識価値を云々することができるようなものではない。そのため、クリプキにとって、その記述の内容は全くトリヴィアルになるのである。すでにみた、クリプキのルヴェリエの海王星の例はこのことを示している。さらに、極端にいえば、それが全く「私的」な記述であっても構わないことになるのではないだろうか⁽¹⁴⁾。

クリプキの指示の因果説は、「指示の継承」が名前の使用によって行われることを本質とし、はじめの名前の固定における記述がどのようなものであれ、その指示の伝達自体にはそれは関係しない。しかし、少なくとも、指示の社会的継承を問題にする限り、われわれはこのような見取り図を受け入れることができるであろうか。それはできない、と思われる。

実は、クリプキ自身、「名指しと必然性」における自然種名の指示の継承について、このような指示の伝達の描写が、本来的に不十分であることに気づいている。そしてこの点に、後にふれるパトナムとクリプキの差異が関わりを持ってくるのである。パトナムとクリプキは、自然種名の意味は、その諸性質と同義ではなく、指示は理論から独立している

と考え、お互いの指示理論を同様の立場をとるものとして認めあった。しかし、クリプキの場合、自然種名の指示の継承はパトナムの場合と若干異なっており、パトナムは、後になって、その点を批判するようになるのである。

「名指しと必然性」において、自然種名の指示は、固有名の指示と全く同様に固定されているとクリプキは考えた。従って、自然種名についてその性質を表す記述は、その名前そのものと同義ではなく、その指示を固定するために使われるものである。例えば、「金」の様々な性質、展性、延性に富んでいること、金色をしていることといったことは、金を金でないものから見分ける標識として使われるかもしれない。しかし、それらの性質は、修正されることもあり得る（金は本当は金色でなかったかもしれない）。つまり、それらの性質は、金という言葉の意味と同義ではなく、金という名前の指示を固定するために使われるのである。ここまでは、クリプキとパトナムの考え方は同じである。しかし、クリプキは、その物質の物理的組成を表す言明は、固定指示子として、その自然種名との必然的同一性を表す言明を構成すると考える。金の例で考えれば、「金は原子番号79の物質である」という言明は、アポステリオリで（それは経験的に発見された事柄であるから）、必然的な真理を表すとかれはいうのである。

しかしながら、クリプキが、自然種名の意味とその諸性質は同義ではないというとき、かれはどのような見取り図を描いているのであろうか。かれの見取り図は、実にプリミティブである。すなわち、ある自然種は、発見されると、そのある性質によって固定的に指示される。そこから、その名前の使用によって、指示は社会的に伝達されていくといった見取り図である。ここでもやはり、「アプリオリで偶然的な真理」を生み出す一種の命名儀式が考えられているのである。だが、このような命名儀式に用いられる記述はアプリオリな真理といえるのであろうか。指示を固定するための最初のサンプルがもし誤って選び出されていたとするならばどうだろうか。例えば、金と黄鉄鋼を含んだサンプルを、そのサンプルが持っているある性質によって同定した場合、金の指示を固定する性質としては、その性質は修正を受ける必要がある。つまり、ある性質が、当初の指示を固定するために、アプリオリに用いられるにせよ、その指示はほかの性質によって固定されうる可能性を持っている。そこには、われわれの経験的探究の余地がある。実情は、クリプキの見取り図とは異なり、当初の記述がアプリオリに固定した指示を単なる名前の使用によって継承するのではなく、このような指示のメカニズムの洗練によって、われわれは指示を固定するのではないだろうか。

クリプキは、自然種名に関しては、経験的探究によって、指示を固定する記述の修正や追加があり得ることを認め、固有名の場合のように厳密な理論を描き上げるつもりはないと断っている⁽¹⁵⁾。しかし、ある自然種に普遍的に当てはまる特性は、「もしそれが真であれば」必然的真理である、という主張は崩さないものである。ここでかれがいう「もしそれが真であれば」という表現はくせ者である。それが意味するのは、もしある自然種に対するわれわれの経験的探究が終了し、ある物理的組成を固定的に指示することのできる固定

指示子として、われわれがある特性の理論的言明を手に入れることができれば、ということである。しかし、そのような経験的探究の終了をわれわれはどのように知るのだろうか。ここでクリプキが用いている「必然性」の意味は、パトナムの用いる認識論的な意味のそれとは異なっている。しかし、物理的特性の記述は、われわれの経験的知識の総体と切り離すことが可能であろうか。パトナムのクリプキ批判の焦点はここにある。従って、われわれは次に、パトナムのクリプキ批判を見てみたい。

5. パトナムによるクリプキ批判

パトナムは、クリプキの指示理論と自らの指示理論の類似性を早くから指摘し、ともに同じ立場を取るものとして認めあった。しかし、かれ自身の哲学的立場が「内在的实在論」として自覚されてくるにつれ、かれとクリプキとの根本的な相違が明らかになったのは、すでにふれたとおりである。われわれは、その端緒を、1980年にイタリアの百科事典の一項目として執筆された「可能性と必然性」という論文に見いだすことができる⁽¹⁶⁾。パトナムはこの論文の中で、可能世界の概念を問題に付し、D. ルイス、スタルネイカーといった、可能世界に対して实在論的な立場を取り、反事実条件文の真値値を異なる可能世界の間での「類似性の尺度」によって確定的に与えることができると考える論者に異を唱えている。パトナムの論点は、その「類似性の尺度」というのも、現実の中でのわれわれの関心、直観が与えるものであり、真値値を与えうような客観的な尺度とは到底なり得ない、というものである。そしてパトナムは、可能世界を通じて同一であるとされるクリプキの「本質」をこの脈絡で問題とするのである。

しかし、ここでのパトナムのクリプキへの態度は、はなはだ好意的である。パトナムは、クリプキがルイスと異なり、可能世界を単に仮想的な状況と考えているにすぎないことを指摘し、クリプキの本質に関する理論は、指示対象の「本質」は現実においてわれわれがパラダイムケースとみなすものによって規定されることを示していると理解するのである。そして、パトナムは、可能性の概念が本質的に現実における指示のメカニズムによって制約を受けているものであるならば、それは単に言語相対的なものにほかならないと考え、ルイスのように、可能世界に实在論的な解釈を施すことは行き過ぎとみなされねばならないとするかれの主張の裏づけにクリプキの主張を用いているのである。

この「可能性と必然性」の論文は、A. J. エイヤーによる経験主義的立場からのクリプキ批判への言及をも含み、1989年の「水は必然的に H_2O か」⁽¹⁷⁾に見られるクリプキ批判の基本的な論点はすべて揃っていると言ってよい。しかし、この時期のパトナムは、のちにかれ自身が述べているように、クリプキの可能世界の概念をカルナップの状態記述に類似的な言語相対的な枠組みとして理解しようと努めており、「形而上学的必然性」といったクリプキの本質主義を「クリプキ自身のテキストから追い出してごまかそうと試みていた」⁽¹⁸⁾のである。それゆえ、この論文と同時に、やはり百科事典の項目として執筆された「指示

と真理」(1980)⁽¹⁹⁾では、パトナムは自らとクリプキを「新しい指示論」の提唱者として全く同列に扱っているばかりでなく、1981年の「理性・真理・歴史」において、パトナム自身が、「ある対応関係が本来的に（操作のおよび理論的制約、あるいはわれわれの意図の結果としてではなく、究極的な形而上学的事実として）まさに指示であると信じることは指示の魔術説を信じることに等しい」と語るときでさえ、クリプキはそのような立場からは除かれて擁護されているのである！（パトナムがクリプキを擁護する理由は、クリプキが指示の概念を「前提としている」ということである）⁽²⁰⁾。パトナムが、クリプキに対する見解の誤りを見直すことができたのは、1982年の「なぜ出来合いの世界は存在しないのか」⁽²¹⁾などを通じて、可能世界、様相、本質などの持つ問題連関をかれ自身が見通せるようになったのちのことであろう。

そして、ついにパトナムは、1989年の「水は必然的にH₂Oか」という論文において、エィヤーの可能世界に対しての批判について検討するとともに、「過去に私が取っていた立場よりも、もう少し私自身をクリプキの立場から引き離す」⁽²²⁾試みを行うことになるのである。パトナムはどのようにクリプキを批判しているのでしょうか。

かれは、まず、クリプキが「名指しと必然性」で行った主張は、想像可能性は（客観的）可能性を含意しないというものであるという、大方に認められている見解を支持する。しかし、パトナム自身が主張するのは、水がH₂Oで有り得ないということは、想像不可能ではなく、想像可能だが、論理的に不可能であるということである。この点で、水がH₂Oであることは想像不可能であるといったクリプキの立場とかれの立場とは異なるという。パトナムとクリプキの相違点はどこにあるのだろうか。それはつまり、パトナムが考えている可能性は、クリプキのように形而上学的な様相ではなく、物理学的な様相である、ということである。われわれはふつう、その時代の物理理論によって確立された可能性・不可能性をわれわれの認識に依存しない客観的な様相として受け入れている（例えば永久機関を製作するのは不可能である）。従って、われわれにとって、水がH₂Oではないということは、論理的に不可能なのである。この点においては、（主観的）想像可能性と（客観的）可能性を区別することは当然であり、クリプキがそのような主張をしたことにパトナムも同意する。しかし、クリプキが両者を区別する根拠は、物理学的様相よりもさらに強い、形而上学的な様相である。この点でパトナムはクリプキに異を唱える。パトナムの場合、どのようなケースが氷と見なされるべきかということは（すなわち水の同一性の規準は）、その物質が現実の物理学的法則群によって指示を固定されうること、および、ほかのサンプルと同一の化学的組成を持つことである。しかし、クリプキは、ある仮想的状況にある水が、現実世界の水と同一の法則に従わなくとも、「水」という自然種名は現実の水と同じ物質を指示すると主張するのである。パトナムの立場からは、これは行き過ぎである。パトナムは、何が水であるかということは、われわれの経験的事実に依存していることを重視し、そこに経験的な探究の余地さえも認めている。つまり、現実法則によって固定されている水のパラダイムケースも、将来の発見によって修正可能（defeasible）なので

ある⁽²³⁾。ただし、その場合にわれわれは、水の「意味」が変化したとは言わない。これがかれの主張である。

この立場からパトナムはクリプキの本質主義を問題とする。クリプキが、ある指示対象があらゆる可能世界を通じて同一であることの規準とするものは一体何か。パトナムは、かつては、その同一性を「種的同一性」と見なす論者がとるように、それを言語相対的な一種の規約であると解釈することを試みていた。しかし、クリプキの本来的な立場からはそのような解釈は不可能であることをかれは悟った。つまり、クリプキの形而上学的な直観は「同一性」がそれよりもさらに原初的な観念によって説明されうるという考え方を拒否するものである。ここから、パトナムは、われわれの経験の脈絡となんらの関係も持ち得ないクリプキの本質主義から袂を分かつことをはっきりと明言するのである。

以上のクリプキに対するパトナムの批判から読みとれることは何だろうか。指示の固定は、クリプキの場合、記述内容と本質的な関連を持たない、直接的なものであった。しかし、そのような指示の見取り図にも、指示の多義性をめぐる問題が不可避免的に生じた。ここにクリプキの見取り図の一種の欠陥があった。特に、「指示の因果説」として、指示の伝達を社会的なものとする時、この欠陥は拡大する。固有名や自然種名の正しい使用は、多くの経験的知識を前提としてなされるものだからである。パトナムはこの点、同じ因果説を取りながら、指示の固定が一回きりのものではなく、社会的に補完されうることを積極的に認めた（言語的分業 The Division of Linguistic Labor）。ここに、同じ指示の因果説を取りながら、本質を直接的に指示しうると考えたクリプキと、指示の固定に際しての経験的知識の重要性を認めたパトナムとの差異があらわれているといえる。もちろん、
「指示の因果説」として優れた見取り図を提供しているのは、パトナムの理論であろう
(24)

しかし、そのパトナムにおいてでさえ、クリプキと自らの立場との違いを自覚するまでに、かなりの時間を要しているのである。それには、パトナム自身の立場の不明瞭さも関係している。それは、指示に対するパトナムの实在論的態度である。パトナムは、指示対象がそれについて行われる様々な記述と同義ではないことを示す例として、双子地球の例を考案した。そのなかでかれは、地球とその地球そっくりの惑星にある二つの物質が、あらゆる特性を同じくし、外見上、同一のものとしか見えない場合でも、もしも、一方はH₂O、他方はXYZというように、化学的組成（潜在構造 hidden structure、深層構造 deep structure、究極的組成 ultimate constitution）が異なれば、両者は同一とは言えないといい、その事実を「環境の寄与」（The Contribution of the Environment）と呼んだ。つまり、パトナム自身も、指示の継承が物理的対象の同一性に根拠づけられていることを、指示の重要な一要因として認めているのである。このことは、自然種名などが、それについての物理的理論を所有していなかった太古から、高度な理論的同定手段を備えた現在に至るまで、同じ「深層構造」を指示してきたと語るとき、特に重要なはたらきを為す（被告有利の原則 The Principle of the Benefit of the Doubt）。

しかしながら、エーテルやフロギストンの例を出すまでもなく、われわれの指示が失敗する例がある。このような場合、「環境の寄与」は指示そのものを無効にするものと解釈しうるのではないだろうか。いや、むしろ、このような場合には、まず指示の伝達が破綻すると考えた方がよいのだろうか。つまり、このような場合は、深層構造それ自体が問題となるのではなく、その言葉が何を指示しているのかについて、われわれが他者に言語的手段で伝達するということが問題となるのではないだろうか⁽²⁵⁾。

このような問題をパトナムは「指示対象は意味の一部分である」⁽²⁶⁾ということによって、すなわち、指示を「意味」の一部に含めることによって回避する。しかし、すでに見たように、パトナム自身が、指示対象の固定には、その対象の振る舞いが一定の法則性を示すということが重要であると考えているならば、深層構造それ自体が特権的な地位を占めることは許されないはずである。パトナムもそのことは認めている⁽²⁷⁾。あるいは、かれはこういうかも知れない。深層構造が物質の法則的振る舞いを説明するということそれ自体が、現象の説明として、われわれが世界を見る言語的な枠組みに織り込まれてしまっているであり、それゆえ、指示は客観的でなければならないのだ、と。ここには、指示の客観性と、その指示の伝達手段としての言語に関わる真理概念の客観性のいずれにプライオリティーを与えるかという込み入った問題がある。パトナムはこの問題にはっきりとした回答を与えていない。

いずれにせよ、パトナムの成熟した哲学的立場が、かれ自身によって「内在的实在論」と呼ばれるとき、その「实在論」として核心は、指示および真理についてのかれの客観主義的な見方に基づいている。しかし、その指示についての客観主義的な捉え方は、パトナムをして、かれとクリプキの哲学的な立場の相違を長らく見誤らせた（「指示が前提となっている」というクリプキの擁護の仕方はここに関連する）。そのことだけは間違いあるまい。

【引用文献】

Kripke, S. A., (1972) *Naming and Necessity*, 1st published in *The Semantics of Natural Language*, eds. D. Davidson & G. Harman, Dordrecht, 253-355. Revised and enlarged ed. Harvard UP 1980. (『名指しと必然性』八木沢・野家訳、産業図書、1985年)

(1977) "Speaker's Reference and Semantic Reference" in *The Philosophy of Language*, ed. A. P. Martinich, 2nd ed. Oxford UP 1990, 248-267. (「話し手の指示と意味論的指示」黒川英徳訳、『現代思想』1995年4月号)

(1979) "A Puzzle about Belief" in *Meaning and Use*, ed. A. Margalit, Dordrecht, 1979, 237-283. (「信念のパズル」信原幸弘訳、『現代思想』1989年3月号)

Donnellan, K., (1966) "Reference and Definite Descriptions" in *The Philosophy*

- of Language, ed. A. P. Martinich, 2nd ed. Oxford UP 1990, 235-247.
- Dummett, M., (1973) *Frege : Philosophy of Language*, 2nd ed. Harvard UP 1981.
- (1978) *Truth and Other Enigmas*, Duckworth. (『真理という謎』藤田晋吾訳、勁草書房、1986年)
- (1981) *The Interpretation of Frege's Philosophy*, Harvard UP.
- (1993) *The Seas of Language*, Oxford UP.
- Putnam, H., (1975) *Mind, Language, and Reality*, Cambridge UP.
- (1981) *Reason, Truth, and History*, Cambridge UP. (『理性・真理・歴史』野本・中川・三上・金子訳、法政大学出版局、1994年)
- (1983) *Realism and Reason*, Cambridge UP. (『实在論と理性』飯田・金田・関口・山下訳、勁草書房、1992年)
- (1988) *Representation and Reality*, MIT Press.
- (1990) *Realism with a Human Face*, Harvard UP.
- Frege, G., (1) *Function, Begriff, Bedeutung*, 7 Aufl. ed. G. Patzig, Göttingen, 1994.
- (2) *Logische Untersuchungen*, ed. G. Patzig, Göttingen, 1966. (『フレーゲ哲学論集』藤村龍男訳、岩波書店、1988年)
- Wittgenstein, L., *Philosophische Untersuchungen*, in *Ludwig Wittgenstein Werkausgabe* Band 1, Suhrkamp, 1988. (『哲学探究』[『ウィットゲンシュタイン全集』第8巻]、藤本隆志訳、大修館書店、1976年)
- 黒田亘、『知識と行為』、東大出版会、1983年。

【注】

- (1) Kripke, *Naming and Necessity*, 79. n. 33. 以下、引用はHarvard版による。
- (2) *Op. cit.* 50.
- (3) Wittgenstein, *Philosophische Untersuchungen*, §47.
- (4) ダメットは、執拗にクリプキを批判し、フレーゲの「意義」の重要性を強調する文脈で 'bare fact' を問題にしている。様々な箇所に散見するダメットの「指示の因果説批判」のアウトラインは以下ようになる。
- ① 固有名を聞いただけでその指示を意図できると考えれば、それをただ固有名として認知することのできる理解のレベルとその固有名が適切に使用される仕方を知っているというレベルが区別できなくなる。従って固有名の理解に二つのレベルの相違がある。
- ② 上の二つのレベルの区別は、命題の内容を知っているというレベルとそれを表現する文の真理値を知っているというレベルに対応する。
- ダメットは、固有名の適切な使用の理解は、その固有名を構成要素として持つ文の理解

を前提にしていると考え。ゆえに、①は②を前提とする。ここから、指示対象についてのbare factではなく、その固有名についての意義の理解を優先させるダメットの主張が導かれる。また、この主張はフレーゲと共通である（文脈原理）。

しかし、フレーゲの理論では、②を前提とすることは、固有名が指示対象を持つことを必要条件とする。この点で、固有名が指示対象を欠く場合でも、その固有名が文の中で使用された場合、その文が真理値を持たねばならない（例えば、「アーサー王は存在しない」は真である）と考えるダメットは、フレーゲを越える理論を求める。かれはその場合も、固有名のもつ意義によってその適切な使用法が与えられるとし、フレーゲの实在論を批判するのである。しかし、他方で、意義が「意味」の一構成要素として客観性を持つためには、二値原理を前提とすることなく、意義が真理の観念と何らかの関係を持たなければならない。ダメットの「意味の理論」の問題はここにあるが、ここではこれ以上立ち入らない。Cf. "Frege's Distinction between Sense and Reference", "The Social Character of Meaning" in Dummett (1978), "Existence" in Dummett (1993), etc.

(5) *Naming and Necessity*, 89.

(6) *Op. cit.* 87. n. 37., Cf. Donnellan (1966).

(7) 黒田、54.

(8) *Naming and Necessity*, 85. n. 36.

(9) Kripke (1977), 259.

(10) *Op. cit.* 256.

(11) フレーゲの「意義」が確定記述に限定されないことについては、Cf. Dummett, "Frege's Distinction between Sense and Reference" in Dummett (1978), 128., Dummett (1973), 110-111.

(12) フレーゲの「意義」の客観性については、様々な問題点がある。フレーゲ自身はその客観性を認めているが（"Über Sinn und Bedeutung" in Frege (1), S. 27.）、同時に、意義が個人方言に従って「揺らぎ」（Schwankung）を持つことを述べていることは周知であろう（Cf. *op. cit.* Anm. 2, "Gedanke" in Frege (2), S. 65.）。クリプキのフレーゲ批判はこの点を過度に強調したものである。これに対して、ダメットは、フレーゲの意義が個人方言によって揺らぎをもつことを認め、さらに、言語の社会的な性格を考えたとき、この欠点は補正されなければならないことを認めたうえで、それはフレーゲの理論を根本的に改訂するまでにいたるものではないと述べ、フレーゲを弁護している。Cf. "The Social Character of Meaning" in Dummett (1978), 424-426.

(13) *Naming and Necessity*, 96. n. 42.

(14) クリプキは、固有名の学習によって、それらが外延を等しくすることを学ぶと考えているが、その学習が具体的にどのようなものかは疑問である。かれは、「ヘスペラス」（宵の明星）と「フォスフォラス」（明けの明星）の例について、ある親が子供を明け方に外に連れ出し、空を指さし、「あれがヘスペラスだ」と教えたところで、それは誤りで

はないという。そして、「提示様式」の違いは、正しく言語を学ぶ際の問題にはならないと述べる。しかし、上のような教示の仕方は、コンテキストによっては誤りとなる場合も考えられる (Cf. Kripke (1979), n. 43.)。クリプキの「信念についてのパズル」には、ダメット、クワイン、ディビットソンへの言及も含む、細かい活字で13ページにもわたる詳細な註が付されている。しかし、邦訳では紙面の都合上割愛されているのが残念である。

(15) *Naming and Necessity*, 137-139.

(16) "Possibility and Necessity" (1980) in Putnam (1983), 46-68. 以下、パトナムの論文に関しては、論文集の出版年だけでなく、初出の年代も記す。

(17) "Is Water Necessarily H_2O ?" (1989) in Putnam (1990), 54-79.

(18) *Op. cit.* 65.

(19) "Reference and Truth" (1980) in Putnam (1983), 69-86.

(20) Putnam (1981), 46-47.

(21) "Why There Isn't a Ready-Made World" (1982) in Putnam (1983), 205-228.

(22) "Is Water Necessarily H_2O ?" (1989) in Putnam (1990), 54-55.

(23) しかし、パトナムは「物理学的な可能性はその時代の物理理論に相対的である」というつもりはない。「なぜなら、われわれが適用可能な最善の理論を用いていることが理解できるからである。このように、認識的な意味における可能性、すなわち、適用可能なわれわれの最善の知識における可能性は、あたかもわれわれの知識から独立の事実であるように語られるのである」(*Op. cit.* 72.)。

(24) ダメットも、クリプキを批判する文脈で、パトナムの「言語的分業」を社会的現象としての言語活動に不可欠として 評価している。Cf. "The Social Character of Meaning" in Dummett (1978).

(25) ダメットがパトナムの指示理論を補足しようとするのは、このような観点からである。Cf. *op. cit.* 427-430.

(26) Cf. "The Meaning of 'Meaning' " in Putnam (1975).

(27) Cf. *op. cit.* 241., cf. also Putnam (1988), 34-35.

(付記1) 藤田晋吾先生には、論文の草稿に目を通していただき、誤訳の御指摘等を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

(付記2) 本論文脱稿後、*Journal of Philosophy* (1994, Sep) に掲載されたパトナムのデュレイ記念講演を読み、「内在的实在論」も彼にとっては本来的な立場の表明ではなかったことを知った。この点については、機会を改めて論じることとしたい。

(うえだ・とおる 筑波大学大学院哲学・思想研究科在学)